

村尾忠廣 (愛知教育大学)
記録: 藤島 琢哉 (ヤマハ)

Q: 南高 (カシオ計算機) 装飾音符の扱いは .

A: 対象から外している . 短-長という枠組ではとらえない方がよい . 装飾音符はそれ自体 , 短-長のアクセントを持っているのは確かだけれども .

Q: 矢向 (九州芸工大) 基本拍が徐々に早くなっていくようなものはどうとらえるか .

A: 奏法上のニュアンスは除外して考えている . 音長変化として記譜したとすると , long-short-shorter として分析することになる . 演奏ニュアンスは , コンポジットレベルとパフォーマンスレベルに分けて考えるべきで , 今回はコンポジットに限っている .

Q: ここにアクセントがつくべきというイメージは演奏のものなのではないか . 除外するといいいながら , 演奏のことに依存してしまっている面はないか .

A: シンコーションで「ミソードのソが長いからアクセント」というように , 演奏外のコンポジットのアクセントが言われている . この場合「音長だけ不一致 , 他は拍節に一致しているのでパフォーマンス上はソに強勢を置いてよいだろう」となる「ソソーシ ドレーミ」ではシにコンポジットレベルのアクセントがない . レを強調すると一層不安定になるからアクセントをつけて演奏しない , ということにもなる . このように , 演奏はコンポジット構造に従うだけではなく , 拮抗したり補ったりするものと考えている .

Q: 平賀 (図書館情報大) 記法 , 不統一があるように思う . 3つの音長間の長短変化を示すならば 2つの記述で済むはずである .

A: そうですね . 有り難うございます .

Q: 竹内 (亀岡高校) 長短でのアクセントの例は , 実は短は長が分割されて現れたように聞こえているという可能性はないか .

A: それは階層レベルの話になってくる . 今回は考えていない .

Q: メトリックストラクチャの影響はあるのだろうか . 強拍にあるときと弱拍にあるときで違いがあるだろうか .

A: 拍節化そのもののプロセスは , 別なので伏せた . 最初に 3拍子ありきでやると , ニワトリタマゴの問題になってしまう .

(4) 音楽学者がインターネットとつき合わずにすむ方法? —音楽学と情報処理の関わりを中心に—

瀬山 徹 (大阪芸大)
記録: 藤島 琢哉 (ヤマハ)

フリーディスカッション

矢向 (九州芸工大) データベースに更新の思想がなかったのが 60年代の失敗の理由 . この点は大きい . 今度はどうまくいけるのではないかと .

瀬山 その通り . 分析とデータベースがかみあっていなかった . 今データベースに光が当たっている . 分析でデータを生み出してきたのが , データベースで調べられるようになる . 小泉先生も , いらぬ労力をコンピュータに任せたいとおっしゃっていた . やっとその時代かなと思う .

平賀 (図書館情報大) タイトルは文字通りの意味かと思っていた (むしろそう期待していた :-). ネットワークは使うなら使うで一方では弊害もあるので . それとはともかく , 必要性を強調されるのはわかるが , 具体的にはどういった利用方法や利点を考えているのか .

瀬山 共同研究の大事さ . 研究は世の中と無縁ではいられない . 学際交流の阻害要因として , 次のようなものがあると思う . (OHP)

- 文化的 (研究のあり方 , 個人主義)
- 環境的 (ネットワーク)
- 経済的 (機材)
- 社会的 (情報の偏在)
- 人間的 (人どうし顔を合わせる必要がある)
- 技術的 (どんな交流がやれるのか)
- 心理的 (しっくり来ない)
- 歴史的 (前例がない/今までの経緯)

岡田 (神戸大) 音楽学者は機械をなめている「音楽は数値では測れない」 . 劣等感を持ちつつ軽蔑 . 一方計算機屋は音楽学者をなめる「コンピュータわからないなんて . 議論が主観的だ」 . しかし , 例えば昔の人の演奏のテンポ揺れがどうもよくわからない , 機械で調べられたら研究がうんとはかどるのに , というようなケースもある . 耳で聞いて何か気づく , それを数値的に見てみるといったやり方があるのではないかと .

平賀 現在コンピュータでできることといったら , 音楽学の人から見ればかなり低レベルに映るだろう . しかしコンピュータ屋の立場から言えば , 当たり前にも思えることこそ , 実はたいへん難しいとも言える . だからコンピュータや共同研究にあまり過度な期待を抱いてもらっては困るし , むしろ言葉も口々にできない幼児を古典文学の粋を理解できるところまで引き上げてやるぐらいの覚悟と意気込みをもって臨んでいただかないと , 失望につながるのではないかと .

矢向 コンピュータを人の知覚に合わせるというのは無理だと思う . 人にはわからないがコンピュータでは簡単という分析もある . そういう使い方をすれば , 人の分析の盲点をカバーできるのではないかと . 人間は , 目立つところだけを感じて記述してしまい「知っているけど気づいていないこと」を見落としてしまう場合が多い .

村上 (ローランド) データベースの構築に期待が持てることだが , 何を果たせるか , どう分類しどう蓄えるのかという点に , 分析研究と同じような罫があるのではないかと . どういうパターンで残すのかに , データベース作る人の主観 , 価値観が入ってくる恐れはないかと .

瀬山 データベースのもとになるものが問われるという点では , 音楽学自体が反省を迫られているといえる . 考え方として 3点ある .

1. documentation の問題
 - 伝統音楽... 記録すると変質してしまう .
2. ヨーロッパ育ちの学問であるということの問題
3. インサイダー (insider)/アウトサイダー (outsider)
 - 外部の学者なのか , 文化の担い手なのか .

データベースをどうするかということ以前に考えないといけなことが , ネットワークの発達で情報が飛び交うようになった今 , 噴出してきているといえる .

村尾 「分析研究は自明なことを追認することだった」とあるけれども , 自明と思ったことがそうでないことがほとんどではないかと . (おぼろづきよの例) 例えばアウフタクトの研究の際 , データが膨大で手作業で検証は無理 . 計算機屋さんに頼んで分析してもらったら , 結果は思っていたのとずいぶん違っていた . そこからまた新たな疑問発見につながっていった . このように , 自明なこともあるけれども , データをとって見てまた考えて仮説を立てるといことが , できるようになった時代であると思う .

瀬山 確かに分析が有効な局面はある . 予稿は誇張して書きました .

岡田 計算機屋さんは , コンピュータで確認することが快感なのではないかと . 指揮者のふりぐせや , パッサとハイドンの音使いの違いなど , 昔からいわれていたことを計算機でやって検証するといったことがあると思う .